

専門領域別研究発表 | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

⌚ 2025年8月29日(金) 9:40 ~ 10:39 🏢 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[3a701-04] アダプテッド・スポーツ科学／口頭発表①

座長:安藤 佳代子(日本福祉大学)

9:40 ~ 9:54

[13ア-口-01]

大学生のデフスポーツに対する意識変容 2

ろう・難聴者とのスポーツ経験の有無に着目して

*赤羽根 颯河¹、齊藤 まゆみ¹、中島 幸則² (1. 筑波大学 、2. 筑波技術大学)

9:55 ~ 10:09

[13ア-口-02]

運動部活動経験が信念およびアダプテッドの考え方に及ぼす影響

体育教師を志望する学生を対象に

*平間 千晴¹、村上 祐介² (1. 順天堂大学大学院、2. 順天堂大学)

10:10 ~ 10:24

[13ア-口-03]

弱視者の動的バランス能力に影響を与える要因の検討

*朝海 仁美¹、齊藤 まゆみ² (1. 株式会社パソナグループ、2. 筑波大学)

10:25 ~ 10:39

[13ア-口-04]

国内ブラインドサッカー大会における頭部接触の実態と安全性に関する一考察

*相川 貴裕¹、河野 喬¹、原 幸輝²、加地 信幸¹ (1. 広島文化学園大学、2. 広島文化学園大学大学院人間健康学研究科)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

2025年8月29日(金) 9:40 ~ 10:39 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[3a701-04] アダプテッド・スポーツ科学／口頭発表①

座長:安藤 佳代子(日本福祉大学)

9:40 ~ 9:54

**[13ア-口-01] 大学生のデフスポーツに対する意識変容 2
ろう・難聴者とのスポーツ経験の有無に着目して***赤羽根 颯河¹、齊藤 まゆみ¹、中島 幸則² (1. 筑波大学 、2. 筑波技術大学)

昨年の学会大会では、デフスポーツに関する講義が、ろう・難聴者への理解とろう・難聴者のスポーツにおけるコミュニケーションの要素を含むことが、受講者に対してろう・難聴者への興味・関心につながることを報告した。先行研究より、対象者の障害当事者とのスポーツ経験の有無が、障害者への理解や興味・関心につながると示唆されている。以上より、本研究の目的は、デフスポーツに関する講義がろう・難聴者への興味・関心に与える影響について、スポーツ経験の有無に着目し検討することとした。対象はスポーツ系、医療系、教育系の学部に所属する12大学の大学生586名である。調査方法はデフスポーツに関する出前講義として1コマ分の授業を行い、講義の前後でアンケート調査を実施した。講師はろう・難聴者と聴者がそれぞれ担当した。調査内容はろう・難聴者とのスポーツ経験の有無、デフスポーツへの興味・関心であった。デフスポーツへの興味・関心については6項目を4件法で回答を求めて、とてもそう思うを3点、そう思うを2点、そう思わないを1点、全くそう思わないを0点とし、「スポーツ経験有り群」、「スポーツ経験無し群」に分けて混合分散分析を行った。分析にはIBM SPSS Statistics ver30 for Winを用いた。その結果、「スポーツ経験有り群」と「スポーツ経験無し群」とでは、6項目中5項目で被験者内効果と被験者間効果において有意な差が見られた。しかし交互作用では有意な差は認められなかった。本研究のデフスポーツに関する講義は、スポーツ経験の有無に関わらず、ろう・難聴者への興味・関心が高まるが、ろう・難聴者とのスポーツ経験は、ろう・難聴者への興味・関心によりポジティブな影響を与えることが推察される。今後は、スポーツ体験を含むプログラムの検討が必要である。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

■ 2025年8月29日(金) 9:40 ~ 10:39 ■ 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[3a701-04] アダプテッド・スポーツ科学／口頭発表①

座長:安藤 佳代子(日本福祉大学)

9:55 ~ 10:09

[13ア-口-02] 運動部活動経験が信念およびアダプテッドの考え方に及ぼす影響
体育教師を志望する学生を対象に*平間 千晴¹、村上 祐介² (1. 順天堂大学大学院、2. 順天堂大学)

誰もが楽しめる体育のためには、体育教師がアダプテッドの考え方を持つ必要がある。しかし、体育教師は信念のタイプによってアダプテッドの考えが受け入れづらくなっている可能性がある。信念が形成される経験の中でも、体育教師においては運動部活動の存在が大きいと考えられる。そのため、今後アダプテッドの考え方を体育教師に浸透させていくには、運動部活動の経験と信念の関係性を知る必要がある。そこで本研究では、運動部活動の経験がどのような信念を形成し、それがアダプテッドの考え方の受容に繋がっているのかを明らかにすることを目的とした。調査はアンケートを用いて行い、分析対象はスポーツ系大学に通う教員免許取得予定の174名とした。調査項目は、主に、教師イメージと仕事の信念(朝倉・清水,2014)、高校・大学での競技歴と競技者アイデンティティ(磯貝ら,2001)、アダプテッド・スポーツへの意思に関する項目(齊藤,2022)を設定した。結果として、教師イメージと仕事の信念について分析したところ、有意な差があり、管理者型には閉鎖的信念型が最も多く、支援者型には生徒重視型と開放的信念型が多かった($\chi^2(4, N=174)=29.399, p<.001$)。次に、仕事の信念と高校時代の競技者アイデンティティについて分析したところ、有意な差があり、競技者アイデンティティが高い群には開放的信念型が多く、低い群には閉鎖的信念型が多かった($\chi^2(4, N=169)=12.220, p<.05$)。これらのことから、体育教師を志望する学生において、教師イメージと仕事の信念の関係は先行研究で示された体育教師と大きく変わらないが、仕事の信念は高校時代の運動部活動経験によって変わる可能性が示唆された。それらを踏まえ、運動部活動経験と信念、アダプテッドの考え方の関係について考察した。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

⌚ 2025年8月29日(金) 9:40 ~ 10:39 🏢 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[3a701-04] アダプテッド・スポーツ科学／口頭発表①

座長:安藤 佳代子(日本福祉大学)

10:10 ~ 10:24

[13ア-口-03] 弱視者の動的バランス能力に影響を与える要因の検討*朝海 仁美¹、齊藤 まゆみ² (1. 株式会社パソナグループ、2. 筑波大学)

視覚情報や過去の運動経験が動的バランス能力に影響を与えることが、健常者では明らかになっている。しかし弱視者を対象にした研究では、静的バランスに関係するものは散見されるが、動的バランスを取り上げたものは管見の限りでは確認されず、弱視者が動的状況で姿勢維持を行う際に影響を与える要因が明らかになっていない。そこで本研究では弱視者の動的バランス能力に影響を与える要因について、学齢期の運動経験と視覚情報という2つの要因に着目して検討した。対象は弱視11名と健常20名の大学生とし、アンケート調査及び動的バランステストを実施した。動的バランステストは窪田ら(2012)が提示した測定器具を援用して実施し、全3回の動的バランステストで得られたスコアのうち、最小値を除いた2つのスコアの平均を動的バランススコアとして算出した。その結果、弱視者において学齢期の運動経験と動的バランススコアとの間に関連性は認められなかったが、弱視の程度と動的バランススコアとの間には関連が認められた。一方で、健常者においては学齢期の運動経験と動的バランススコアに関連が認められ、学齢期の運動経験が動的バランス能力に影響を及ぼす要因であることが、本研究で用いた動的バランステストからも確認された。これらのことから、弱視者の動的バランス能力に影響を及ぼす要因は、学齢期の運動経験よりも視覚情報であると考えられた。さらに弱視者のアンケート結果から、中学校期から球技種目が増えることや思春期の影響から運動への困難さが目立つようになることが示された。そのため、特に中学校期からの運動経験の質が下がることも動的バランス能力に影響があると考えられた。

■ 2025年8月29日(金) 9:40 ~ 10:39 ■ 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[3a701-04] アダプテッド・スポーツ科学／口頭発表①

座長:安藤 佳代子(日本福祉大学)

10:25 ~ 10:39

[13ア-口-04] 国内ブラインドサッカー大会における頭部接触の実態と安全性に関する一考察

*相川 貴裕¹、河野 喬¹、原 幸輝²、加地 信幸¹ (1. 広島文化学園大学、2. 広島文化学園大学大学院人間健康学研究科)

ブラインドサッカーは視覚を遮断した状態で行われるゴール型競技のため、パラスポーツの中でも特に頭部外傷リスクが高い競技とされる。堤ら(2023)は、東京2020パラリンピックにおいて、1試合あたり平均52件の頭部接触があったと報告し、安全性の確保が重要な課題となっている。一方、国内大会における接触実態の把握は進んでいない。

本研究では、2023～2024年度に開催された日本ブラインドサッカー協会主催の西日本リーグ15試合を対象に、試合映像を用いて頭部接触の発生状況を分析した。評価はブラインドサッカー経験のあるトレーナー3名が担当した。分析の結果、1試合あたりの頭部接触件数は平均14.2件であり、国際大会に比べて明らかに少ない傾向が示された。

この背景には、競技レベルの違いに起因する移動距離やスピードの差があると考えられる。先行研究では、フットサルやサッカーにおいてエリート選手ほど移動距離や高強度運動量が多いことが報告されており、ブラインドサッカーにおいても同様の傾向が推測される。

また、三枝ら(2020)は、熟練選手ほどトラップ時に下向きの頭部角度が大きいと報告しており、こうした姿勢が頭部を接触のラインに入れやすくする可能性がある。国内大会に出場する選手ではこのような姿勢が未習得である者が多いため、接触自体が起こりにくい構造となっていると考えられる。

さらに、視覚障害者は運動時に恐怖心を抱きやすく、その影響で重心が後傾し、手足が前に出る防御的な動作パターンが生じやすいことも接触回避の一因と考えられる。

今後は競技力向上に伴うリスク増加を見据え、予防教育、安全な姿勢・動作指導、装備対応を含めた包括的な対策が求められる。